端唄之人娘　四編

へ 13
3228
4

毬唄三人娘四編序
美婦が貞操の色ある松亭
翁が遺稿を継木乃。さく筆力女
有人ぬしが園みうえ牡丹蓮池の
漁亭あり。含す衆譚みぬくとぞ道
近たけゑが為伽藍の跡みおきとこく。

へ 13 門號 3228 巻 4

昭和九年九月二八日 購求

破戒乃美僧が顛末を拾遺あつめ
合稿なして這篇は青表紙く
能も幼戀の理を示し戯みも淫随の
趣なくあれども家暮み借屋の民和
歌み韻く下萌茨のみき婦しき古歌
あら称ども行巡りて結局ハ續く

出格の玉川や岸の款冬ならぬ画の
位置も芳年が艶ぬ藍み劇草上に
連ぬる筆綴りて色み以ば増花か称誇
緑宗の紫も是江戸前の人情本と看る
官閲して名つ続へて爾云

乙丑春日

一筆舎盈家記

猶ほ八千代をねびるの松八
うひある住の江乃男浪れ氷
未解ぬ心の清みよくと
二度むすぶ貞烈の操
竜吟閑人詠
お民

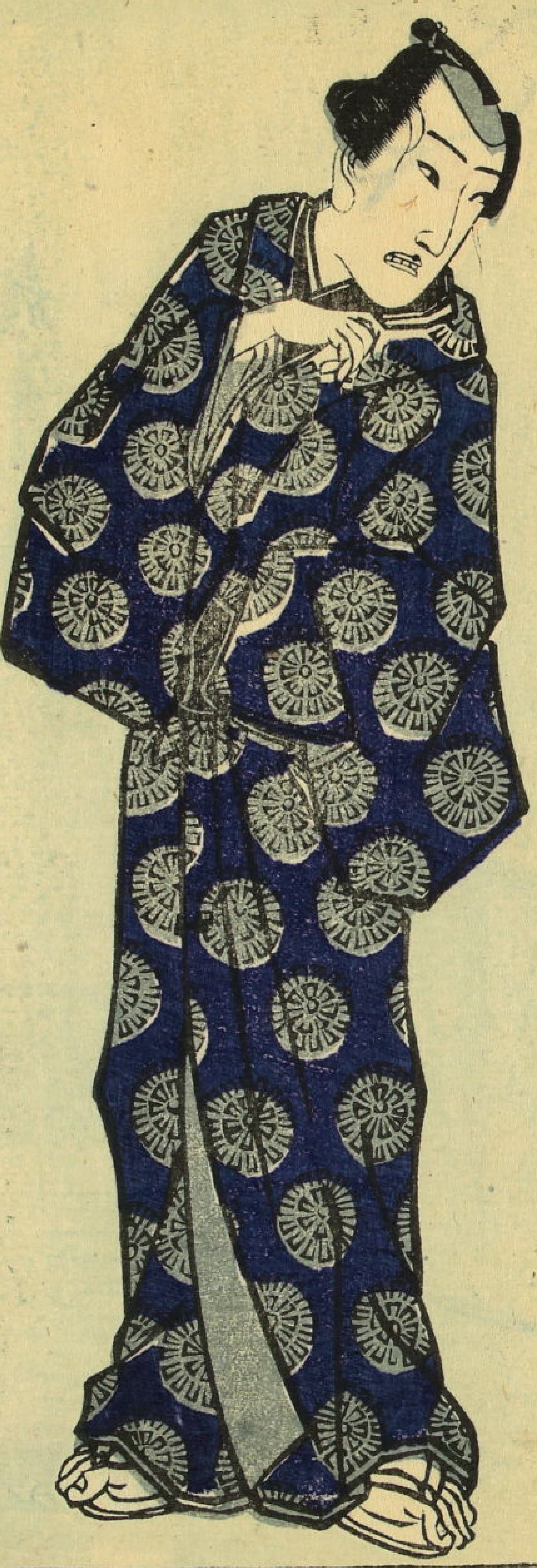
つれなき枕屏風を恨らく
移ろふ家々来枯る中に操正しく
芳年寫畫

早稲田大学図書

一双玉
手千人
枕半點
朱唇萬
客嘗

名妓 綴機

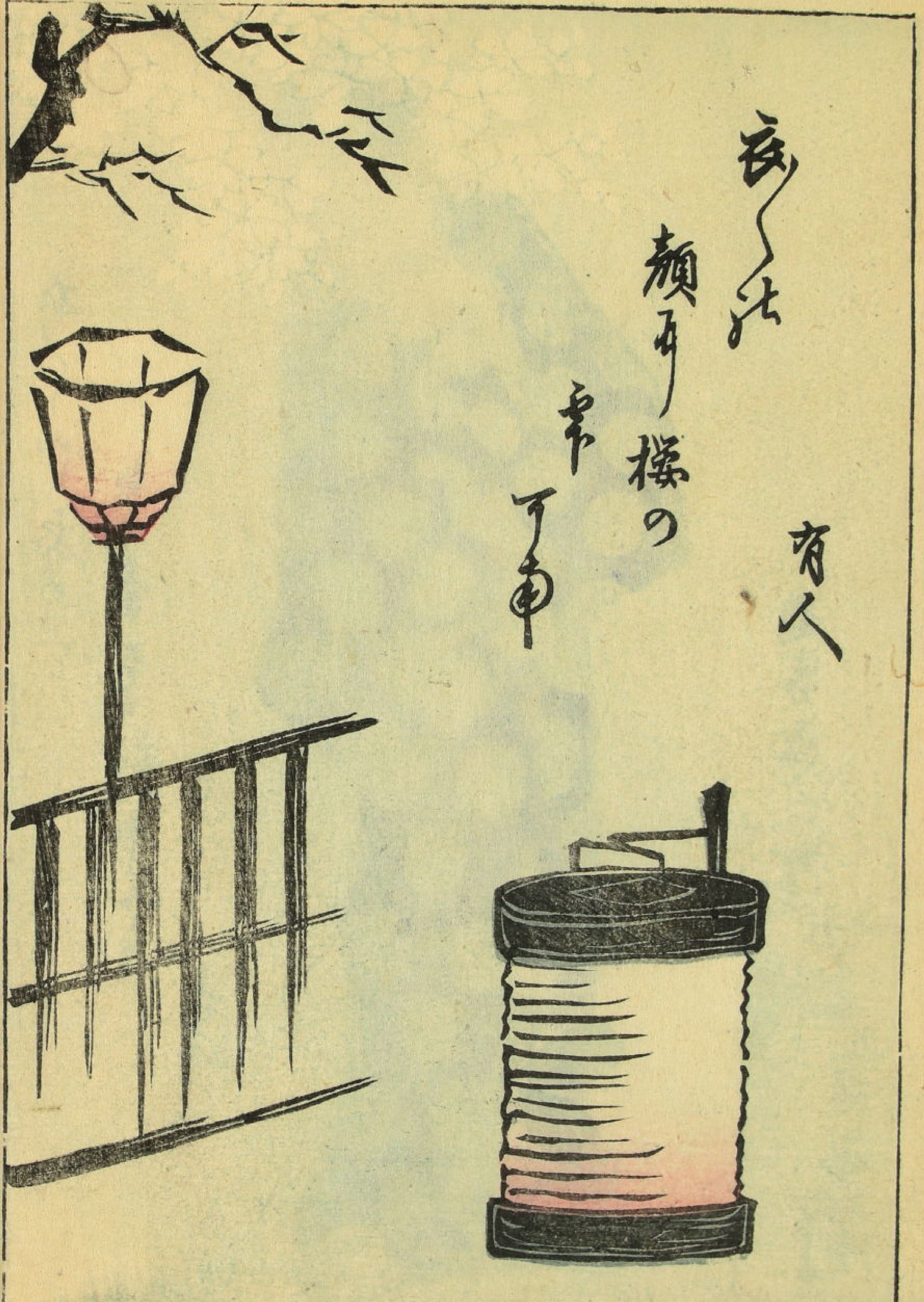
ねくや秀
あり筆ある朝ざくら
童斎



通客雪

玉櫻 芳年画図

早稲田大学図書



艶唄三人娘四編上之巻

江戸 松亭金水遺稿
山々亭有人補綴

第一回

經る是より律六ハ彼お民を誘引運飯てふ看板をひさせし氷月とよ呼酒亭ふいての酒更闌ふ及びしに律六ハ歎手をひそめ「下き二お民さん先刻おめへ不快しやうさ一条ハウント云て背をおて長々氣の毒「そりやアモウ移しておき顔ハ

にするお前さんのことでもそう及ばずながらお力に成ませうよね
総てそりやア何所の仁でも手するお前様が夫々に呑込ンでゐ、せ
口陳の嘘にも百両も出さうといふのじやア藝人じやア
あるまいし余り程六ケしい相人と見へ弟子株「六ケしい
もんだ今獨歩ではお前さんがどうか押附だとおもふのヨ
民「君様で押附といふのは誰でせうと思つて思案をし
たりしが自ら両りながらざりしか民「どうも是ぞろうとおもふ人も
有ませんがマア何処の人でせへ弟子「ツイそこの人ざますけれどもね

云して逢て任かられねどうもして君様にそんなることが何う
極老実になられちやア坊主になつても落附ねへ咄しぞ
たとへば女郎屋でもウント云つて世話をするといふもチト
時代だが甚云が聞たい民「ひどく六かしい子丈どれて
君様のあつたらいへ人じやア仕方もないし弟子に甚云ト云ふは
どんなる代級ンでも弟「イヤもう、お民さんでもねへ少弥
筆ざんすからお前のえばおつしやくしも縁のねへ仁さ
手持つて呉ともらはねへじやアねへか甚云といつて熊野の

牛王を呑せやうとも云やア去ねへ。誓言願り不出
どんがり〳〵一杯酒を呑とまるのヨ 民「お前さんだらう
らしいどうして寝微不出どんがりで 徐「そらが誓言云ざ
ろうぢやアねへかマア呑むと殺て座ねへ 民「夫ぢやア呑と
殺て座弁うらきま女をお云よな 徐「きま女といふのハ能でも
むへがお富さんヨ 民「ヱヽ 徐「さぞビツクリするだろう 民「お前さん
否ゞヨそんなるのざろうと思ツて。いゝか滅不人をおかうだ
ゐ如ナ 徐「コレサ〳〵弓矢八幡常戯ぢやアねへ大係実ゞ

民「夫ざろうてアノ子ぢやア要人さんといふ立流な良人が有
ますアノ子 徐「ざからお前不量攻。云して座すくまゐでござし
のにならう。そんなことがと老実不女うもちやア坊主不殺ても
押附ねへと。殆ど座まいぢやアねへ 民「夫なさうだけれど
組の掛を積ツてもおえらなよしーンば吞微が有ばアノ
子がウントいツさ高が、お前様の為ぢやアお互の女房アノ
中屋を父さまりは嫌ひとし、高が要人さんも清侍
刀不對して撥ねへうら女敵討とうら何とうら大勢が出来

ませう　律「色が悪人をさしてそんなに人まへお富さんも仕合者も
まさ江安んぜが大違ひお民さん夫じやアお前も行ます
江森多へのぞね民「何をえ　律「行とらつて爰の宅で新く
ごとも些しも恙たとへまいりに聾不耳お惣代迄しよく
宅うひとつダイと共そてお前の宅でも此弥へいちく些すと
いさゝじやせう民「夫ならば江酒もよいとして仮ろうしやア有ま
せんか律「夫なれど。爰へ是限おいてお前の宅で養迄さう
お前と己とさゞぞうら女中荒が履違て余川のせ之

内芥子民「実正不動定節でござる（あれが不動定節といふものか　時の流行で帯を上る）
（化粧とりどり似合ねは大つき笑ひ）哉あ人「アヽそれより此家の掛ひきは流り者銭
をうけて入る。お豆ぞヨウ引をきろうけにお民が家へ戻り来
て彼残物銭四にうり落し鶏卵の吸物銭。其代りに
あん蜜で出来て。此辺の鍋の鯛鋼蚕に入れ連利さ
主席「持出民「すこしぬるいやうでござる。ひとつお惣代に焼
して　律「上燗く落し西子の江肴にお前の鉢と焼さ
月夜アこの拍子お撥ひやそ民「どうでもらくじやア有ませんか

伴六

そこで先刻のお咄しつぎさて徒「他でもないが要八さん
上の御首尾もおまへの評判も宜い人であつたがどうかいふ
わけか淫様といふ繁情にたまり迯かなくて宅へは帰り川ク
ぞ法の外へて此頃は漸ともすれば居つゞけで十日も宅
へ帰らねへといふのがどうも御用をもとゝ滞つて来る
上を是非なく病気にして逆ひを世間でも隠しやべに秘く
隠しるよりも顕るゝは尚しとやらで上も素より一家中おかしな
者もあるは様子を其もしつて一時のあるゆゑ自己を悪みて呼ふいと

し。茲おれしを唯べごんは他でもないが。紙しとてるからう淫様と
あいふのけ成りいさ示が御一様も然がん女房にたきぬ之
どやア取知世ば自己もこらく御宿の新地なるのも。ぞろ
とするゆゑ。居ごとおすひ出しさうべ。風上に置のも居
ぞ。表向し悋気をかしも世ば浮気なるは素よりなるし
追出もせぬも。どうするにもかしも手の附ようがないは。そこで
おれしの腕前でお宿を口説落して。今さら吾がびが
百友を他にお宿の悪れゑ居ながらへなぞうりきうと味噌し

流石の貞己もお兄も果文を主君がんぬ違ひ孤麻
のことハ。此内室抔ト異見がましく出かけたら願ふ文ての
大振る竜を侭ハ誰の孫成で邪して居るのざ
武士ふ六るゝ我に外させ恥かしう見れバせひがなへ。主君
を殺して貞己も死ねと刀の柄へ手我かけるかな。マアく
此沢文ハ此経章貞己も恩ある主君のなり命我捨て
のお此度しよふあるめの宝ござへせと富楼那の弁。文
殊の智恵で口説てハみませうが石よりかたい。此案性ざ

かく此趣向なハのちゞまるやうど示た附に刀之味を素早
此光とゆふト呼れ要人さんがおし鞘をひねくして文で
注りバ連出してぞッさりやうちやア罠めへかと。ゆそれさ附
へ。びくらりして帰さばさへ寒げねへ。くらい素細承知と呑込でで
ゆくそこを。追まさが連添女房ふ成男をして呉ろよ
侍ふなるまで兄一言と聞てお民ハ膝すり寄民「伴さん
そりやア実正の咄しで甘ふね伴「現在お前の姉の良人喰
をついてもすぐふ分ろうぢやアねへか性痕ハ咄しがお富さん

を媒に出ておりやア要人さんの身持もなろうろう
と以のめぐ氏「十二支へお富に出ぐとも お前さんの所作
のふる違ひも有升まいぞが、こを程不ふべからく辛抱仕て
居さ云がらんどんの仁が、こを程可智ぢやア行末が案じらるゝ
升ね人 伴「行末ナら今が案じられらア 金があろうが男
が置ろうが、色気のそでねへ仁と生涯汁を抱て添よう
やアひとつでも為イうちに川岸线稼さ方が双方の為ぐ
ろう。亦お富さんの究屈するく。どんな口でもいりやさア我

申ちやア可笑が、自己らんぞがお富さんを女房にすろう
ものろうろうとうるしへ侍見ぞへ歩行してズット呉抜て世話関
母そに広く申参ぶが自己が呉服やそえじめ兵衛のあら
出入家補の十新や十五新へぴえに出来分も新らしく書
院数の世り如の兵衛ぶが第一自己が女房にならあすのんなら
芝居へ二度の稼り月にえせ。去へ花見に梅中の初午
雛祭又夏へ。漁に菖蒲に深舟秋は七草月の宴あその
書見に出るまで我人抱三へかしきぼ。わくまぼアんと是へ

ホンの常盤ぐらゐでも要人さんに添して逢ちやア御當
さんが可哀さうだ　民「実正にお前さんの了簡違ひである
君様もたゞさへ人の嫉。そんな人に添せるくらゐでもなし
全体要人さんのお了見ざア君様を寵なすッて居る殿
様にも賜居が多く先で来るまでも女中ざの裏居る
ざのと手重いよく。ちよいちよい往来ひをするのも西側
丈もこれも落ついてかゝるのも結構ざうだんがそん
な氣で居るのの二番に麻くしへ丈より今アナヽあんなに居る

あんな者でも女房におかく下すって御後生でも出して
お呉ンなまり好く親の代から仕来る高家氏の身の良きる
ようなめので草葉の蔭で親父をはじめ彦三郎も喜び
ませう　徳「夫に月已へ居おいて続とんだ名跡をなし
絹屋とでもなんとでもいくのが　民「夫は今頃のごろごろ
升が此居などもし端でどのやうに云っても押附るさるに
も沢山升から翌日までも御留と云べ嘘に女町で一ノ子の稲
ともせさと上京君様からもいく泡棒にはなりませう　徳「何分

お敎ハヤス嫁月己の女房になる。なかなかいへど。遊蕩て
うかうかおもしろおかしくて居ちやアどんな無実の冤罪に
逢るまいものでもない。皆が毎日々々にたちが一日もも无に方が
宜う民「いかさく五倫切に勤るにやマア訟しに実が入るく
お猪口銭いらでならお世有ませんら徒「ホイ。とんと猪口を
失念しく民「今お胴を出し升からひとつ召あがつてくら
いらできませう徒「モウ十分ならしたから出版と志やう民「毎度
五嶽状。あんの廿足式をト ひきずる自然色に 三百ひき足不どいわく コリ無少出しれくが

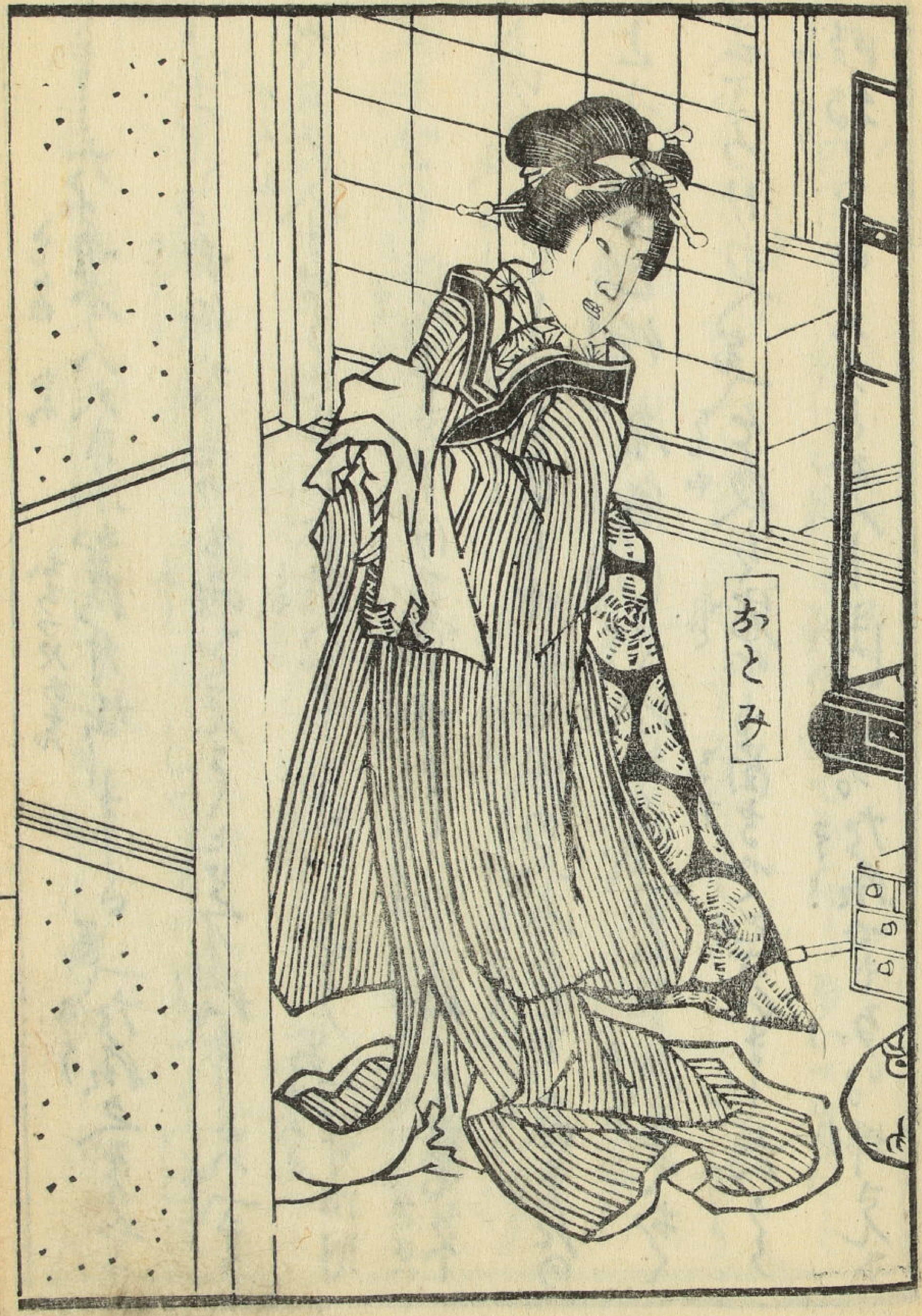
憑とお肴民「毎度御家の毒様ナも日ハ御馳走で作
山丈に先手も結構ナ弟銭いらでき升し徒「マアいやア
ウント云て腹く亟足く何ゝもちと彼周羅銭をあり
にお民がりく押出さく足早にちそ帰り行き

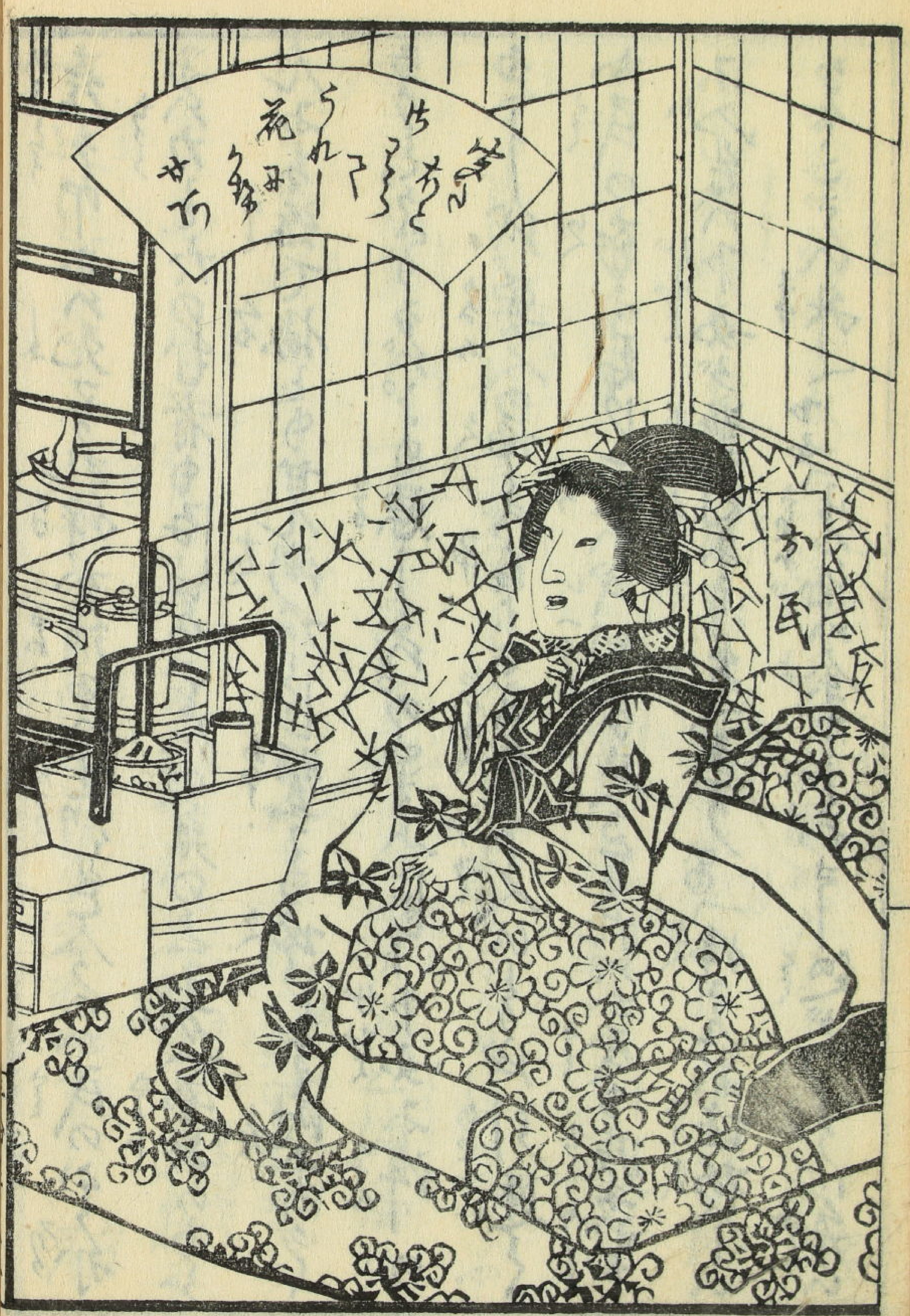
第二回

一秒墨を喰る時ハ万太実銭嘸るとお民ハ件の錢云が
表るしやうの定る銭。八分を絵ド二分へうさごう毛にも
角ても尚銭咋よ世要人が身持の虚実をも守る

うへにて弾六が云しに違はね其時は。さらく彼所に在
がらし時もなく夜すがらじ亦甘ん術もおりぬべく危
もなけれバ此上ハ兎にも角にも急に除よせんと計れバ思案に
落くりしが君微が病身と。いかんお主にじしこそしば夢に
悪かく、お富が許へ参りたりしが此日も要人を之浦屋の
蔵たるさが許にありて夜ふけても帰らざれバ夫の留守に
てかり取く里へ逃んも気まれぬべし。又お民も気病に
て追ひとど。とても極めて手拙きこともあるまじく先

差者弟子の死るれ婦かい縁あ八生別と今へお民のこのかの
ろへ力とたのむ者も隠し居る仁の身の上に万一の事のあら
んにはる孫で悔ともせん術なかりじ翌ても心しき附になからく
乃りと。かうりるべ。よも悪しくの。のさまにはじト下女に許の
由よし戎。要人の帰るべ告よと云在。下人ひとり伐引連てく
お民の家に来りし。此は成則まさへるされバお民も疾ニ門戸
に入れバ下女が案内に座敷へ通り。当て婦さんのお機嫌はいい
るそござんい升。へ下女「先程は余りねどおさし。処がつよりに存い


おとみ


お民

まアたが此所へ大きにお落付あそばしましたネ 嫁「左様さネヤア
よつぽど子供やアモウお客をこまつてビツクリ致しますハ 下女「さう
でござります入ませうぞうして お供へどうかいたしませう 嫁「一寸江戸
ふくつく江嶋子さんよけア来る事も供を帰して直で行
トいふ支度して嫁お民を中形縮の小紋をと。森まつの
上にあられし縫。唐紙めく入来り 民「ヲヤヲヤ能来ておく
生ぶろけなく 嫁「今夜も宿でも留守でござりまたかう
明朝までもあがろうとぞんじまして。左様でもよい。姉さんに

りりのるのでも有つさ時を待て梅でも帰つてよいるのさと
ぞんじて翌日帰つてうた様十とぞんじて来ましさ 民「さう
久々三拾里の所でも宜いさの不是非お前にお様をしまけ
りおたずねるのいるすがあるのでもそれをやうと訪るとお様子
嫁「ありがとうござい留守でござい升からきをお嘘を伺つて
帰りませう 民「それなれにも様く出来る嘘ばかりおなる
それなる民いつでもお帰り。そうして宅へ帰るつもりして
あさの久 嫁「姉上にも帰るうちも支度るいと申して

きむすこさ 民「是ぢやアの中様。チヨイとさんや 下「ハイト 聞りし
彼下女の耳によせ何やらささやく これは下男に主様のそばでも
ぞ出せとしふ下「ハイく畏りました とトレ久ふかく 除させ先へ帰ることへも見え
りたりし縁でお民へよそるる顔色ながらぞ膝へ手をすりませ
事をひそめて云出すことをしての家へ次第に流べし

毬唄三人娘四編上之巻了

毬唄三人娘四編中之巻

江戸 松亭金水遺稿
山々亭有人補綴

第三回

備もお民の云ふまゝ 民「お前を慇懃に悦ぶのも皆様の病
気をホンノ附白。たとへ様でも云ツて。あげなりやア気が済ま
ぬと云ツて 多「たと様でござりますれど君様の手前モウびツくりして
拗しそ逢ひたさおもひじりをるそれかどやら余ツ程悪いのさうら

とぞんじて宜苦労をしてあさましさ放しておいでしと
いふのへどんなするきんで出ゝ　氏「人々うきさるすべてゞあらうバ
御前にあるらいが今もお前の咄しありふも要人さんハ留る
すまとめるの夫くし今日も三浦屋の紫さんと申す所ドゥ
るいの事へ　留「十二今日ハたねど申ア有升まへが。其紫様さんと
申すの所へも共にくハ従弁ほどござい升が宅ニ不見させ
るぞへほしせ方ニるいるでも有ませんうら打捨て置升のサ
氏「其りやア要人さんぶらてまぐろイおへのこと月ニ二度う

二度のお挨びでいまし。あるまじきるでもるし其を兎や
角云ふるいのも嗇でえるぞへあるなれど其ニも程のあつさめの
要人さんハ其類情とは訳し情合でもあるい様子申す先方も女
房ニするきで居る出方も持てず此法へお前の載るる
のも否ざと出て仕がしの居続で十日も帰りねるがあつく
上も病気はしてあるが悪事手筐とたへ人の要り上も
素より此家中でもあうるいのなくるん様子其もよいがあん
まりな仕うさといふまお前を逢ひ出し気と云ッても悋気

いまだ浮気をせざる女の附合ふの事は殊にかくさる人を聞く
悟らざるに読んで今もとの書ての教へ又でも従はゞ連
れ亭主へ教へして呉ろとかゝるゝは一寸ゝと申さ
ば其外の亭主悔しき女は内室様や奥様と云ふ親からは仕へ様ぶ
彼子にかゝる居る時は夫々亭主にも心えるは他
人から申さるゝは実に御前の器量なる世間をおろ
どんなる子でも許る様。ひとつゝも為イうち能不身を
極るひとらて年を追してどうちく従まはうと云事するゝの

下姉が工夫を呼につけ利發なれども女は掌に応じさ
るの有る事よく考へたるものも左様ながら教くかうては人を
奉公して其の皆の為へ不熟と優しく出るの外にてよき
るまで気を晩し皆附返回もおうしぎりしが御中にて菊へ
不だ御跡妻のう十日おゆうも帰る者へるもかまはまし
いろく親御類も通ひてまいる無教育者の者にして
江国役へ乳母しるるもありますし。其の縁様とらば
女も女郎かへめづらしい事達ござりますがさぞめで度く

往うちにハ女房納来ぐるめん。いゝじまじさらう連て来るな
ら連て来て女房にするが宜ござい升のサ是非の事じやア
教さらうと。いふ五くがあるかもしれませんが先度も参で中て
上さまりくを上別の深深さんと申を請出して大婦直
の本へ預けて　無く兄さんの子代産せく夫を育てを
母門さんべ兄さんの追福にもなるござろうと上意い。ひどく
信切に世話しく呉ますし中へ音像をは掛く
ら亀の教せのと云に遠ひがるん限もしろ性をを泥も

兄さんのうちに夫を堪に出しも出もせん。大くさ姉さんに仕
る残中さのハ伴六さんで有ませうが。まさか伴六さんが折く
いひましたと他人に出されもせん。早竟さを残桟さんしろを
女房にして召使が下女にするつてあがる矢ッ張りの事
公人ざなろさがるといろ教されると落附て居ますでうヨ
民「そりや母おかあの心に悪り性な事泥もえさいは肉に出て来る
まけても往るといふる新おし＋音像が病気の法ゆでおいで
のぞうくを徒四五日帰しびに居てお仏壇の先方で出さらうト

早稲田大学図書

いふ気なら宜僥倖にして嫁にも来まいが亦た気さくでゐるのなら
翌日の朝が遅くも晩まで逢ひが来ます。たとへ何ともいふ要人
さんの心持もよくわかるといふものゝ夫が真當に實と思はるゝ。
又下いへども流石恩愛のきづなに引され出世のたよりともや
逢ひの人も有ぞ。妹背の中の道も甚べ。いつになるやらんと逢
ひさへ疲れ出しに良き家がなければお民は世に紀之逃こ
民「お前の気に入らず立が。なんぼちよつと志がなるへ。なる程
素が本気が入るのさ下女になりても素くごといつさ日がれ

お咄しは違てるが吾儕も今じやひとりの婦嫡もろく
家中の下女に知られで逢ふても。なかなかじやたいへん
夫ツ張馬は馬づれていつそ町家へ縁附さ方が気楽で
宜ろうと端ではおもふが夫婦の情た又格別夫に是も角も
此方で斗りどのくらゐ惚て居なつてもんじんの先方が
気がくるはぬ日にや却つて苦労を增すもの。今ちよいさ
逢りはして先方の心が疑はしく翌日も逢ひが来りや
夫に上絨るのへるへ。ひとつ位るへ。気るへたら居ヨト

信実(しんじつ)の姉(あね)が工と気銭(きぜ)断(ぜ)に見えるかり〳〵〳〵女が不当〳〵なる

ほどたる後でござい升(ます) 行(ぎやう)きとも定(さだ)まらずにお戦ぎや升

民「なんでも是(それ)が苦当(だん)ダヨ 留「夫(それ)々いゝが縁(まさ)入(い)物(もの)の仕かけさ

のもあり、襟(きう)銭とけむりがあがる仕るもなり。清(し)元(と)変(へん)紙(がく)へ

包(つ)みこぎ預(よ)ふしてあり升(ます)が 民「夫(それ)々お袖(そで)どんかどうか致(する)ござろう

そ許此附下女(けぢよ)が断不(ふ)当極(おきよくおん)庵の慈悲(せいろく)を持(もつ)する 留「姉(あね)さん

なんでも是(それ)にけるりを取払(はら)って 民「なんぞと思いさがモウ遅(おそ)いなら

翌日(あした)は地(ち)芝(そく)居ますまい。そうして。ごいぶ夜(よ)も更(ふけ)さかう 夫(それ)銭

喰(あが)りさうな寝(ね)ると存じますせう 留「夫(それ)じやいゞ死ませう 姉(おあね)さん

あなたも 民「御相伴(ごしやうばん)を致しませうと見ると 喰(まくど)東のその人で

お民とるすゞく床(とこ)銭の〆名(おもくかど)外に入(い)るがこを翌日(よくじつ)はあさ

まだきより例(れい)の律(ぞん)六入来り 律「まづお目覚(めざめ)でございますの。

此附お民を揺(ゆ)りまして手水(てうづ)を遣(つか)ひ居(い)させしが 民「おや律(ぶん)さん

大造(たいそう)お早(はや)うござい升(ます) 律「慶利(まり)支天様(さま)へ参詣(さんけい)と出かけさ

なア一寸(ちよつとこゝろ)伺ひ申しと 民「此(さつき)るさまさ様(ろくく)頂(いたゞ)より地芝(ちそく)居(い)になるは

まアたアり実(まこと)に済(すま)ません 律「なんの此礼でしょうへ 世大へ イ此相(おまつん)

でござへ升ト云数寄屋町の足立やの男猪荒イのを武家
おかりお服附で持来れバ民「ヲヤマア律さんでもない気字の
毒振ナお止よしなされよんべ 律「一ばんのサ自己もまだ朝飯前ぐら
夫で生汐りなれ云けどのご 民「ヲヤお六の怡好お茶も上るへですサ
律「ナニくお茶も何もいらねへ 下女「今お茶が入る所でござりか
升「アノお内室さんは座敷のお掃除が出来ましさ 民「サア律さん
おちろく色男へ 律「練出をへ押すんでドンダは厄介 民「どうりにて
律「夫ドもう云免して然らむつくお座敷へ御出せうト起より

律六悪ト云ふ 律「コレ少くは内室は昨夜もお帰りで居るか
ほしさう 多「ハイ此晩は々来りて福升がござり縁起へお寄
ござりませんじやう 律「ソイ洞ひませんが頭もまでお悔り
が有るへ振升サ 多「さうでござります此晩は嫁ともいろいろ
談をいたして赤状ぞくかくも権子喰し然いたしましさが
御亭主は親切なかたうござり座へ升 律「ナニは親切も可笑いが
自己も要人さん妻一つ十とは世話する門さこれも
ひとつを側でお前さんが三味線弾一文下清元で

ごぜん升亭「十二君様もんぞへ壱ホ一度お取持をいくした
るすんぞへごぜんません 徳「イヱく たればてるい。云たからす
の不出合下いろく旦那が女将お宅でも側からずうとへされ
るのであるハ発く。丈の気へのがるほじゅう取持んりもうえるる譜
丈也へ自己も御恩のある覧のすぞが。お前さんが身ホとつて
の大ろの丈ぞろお民さんを藤く御耳うち成して座
さの千要人さんの世話ホする自己ぞうく定めて歎方ぞく
おわひざろうが変して大祇いふろげど舟すみいろう戊。

の御後でも有ましさらべ及バるずからお力にあるりまへせうト
我儘云成おりくしお留成すうして。丈彼と称悪計
をめぐらもるるべし

第四回

民「サア御飯が出来ましく 徳「イヤモウお飯だろうで宜さのふ
お酒もお留さんが迷惑ざろう。丈でもましろ望ハ呑ゆる
ゆうだけさ子留「十二君さ衣が御猪口不二口ろこぶでごぶい升
民「それでもこまうるめ出来て来てこのござ子 徳「なんでも苦労を

時に酒が毎晩まで出て居。サアだからお冷さますぐず。うるだ
おつな事に冷たくなるもんだ不挑武どサア　お冷に時下女が　とりつだゞ
下女「アノ谷中の天命院の和尚様と清さんがお力入
まし　民「市妙さんか。大遠なすく傳さんの兄の家
ましヨ　伴「市妙和尚さまも先日も法用におつとめなさる変
へお出でなし中経ナ清さんといふのはいつも蔵書をお弟子のお
のるりごろう　民「ハア　伴「そうだ我のるりぞ　留「坊さんるんぞ
が来ちゃなるがちるい中なるへ　民「十二お婦様香をあげなさる常

戯だらう云ッてドンナ面あるひとだらう皆辞お出しなされ
くさいひとざとけお云。そうしてお出しヤナ。ハイト返回て往
下女も引違ひお。ズカくと変へ入なる市妙和尚様の
跡も後とりに乗りて時限の礼義とのへ。福よかた方に
座供まうけて　市「此婦さんそつへぞ兄引なんへこれを
傳さんのお持ち下女まち子　民「十二是は嬉しどざりまする　市「ハテ
其じや琵琶婦下女へ往ッそお座のヤレくろくしぞ
清「それじやお弟さんは後間へ藝古をお出しなさい　お留

さんでもお元抜とおなりなさつてさつぱり新遠ひがして
ゐらつしやる。富「催合江挨拶を。いつさうとおれて居らる
不如帰でハ大道評判がよくつてお仕合ですねへ浮世の
願ひ世の音級だけハえらいお大今でしく迄も民「夫と
いふのがお親父と浮さんの評判がいゝからサ浮「十二お客
いふまけでも有ませんホンノ水物でございますよ富「アノ浮
さんお前さんを大道出ひかれのお袖さんハどうなさいましたさ
浮「さうアノ子か。改名江常の表使と申すにおあがりなさる屋敷

のお嬢さんに附て御殿へお上りなさいました富「そうでございますか
弥々弟「夫じやア浮しとお富さんハ前別深ざの夫じやア
今日ハお富さんの口玄こそ焼降モウ生精気流行し
て彼岸をえ出ぬかけれども。いとゞ手むさら月ハ多
されど苑りてうてもそ袁ぞすかし付えも執合すへ
コレ浮や伝さんにお暇をせぬか
撫浮の跡とらするハ姫援某が男らしくのちに
天命院弟居とするべき宅中の主者より此

時節妙が施主する青楼亭の浄進料理松源の
三ツ物林葛り大酒盛とあつらへしが当家へ。彼
淫の助が義芸古傳輩る多く成りて。彼とのゝ契く
ゐし一架をひッたり寄添し細別深の雑べども
彼をぬかし悟ふさへ妬るの限りもなく不思民も
日比市妙が屋れ恵ふ付と為く陰六儀なれども
わくるよりも物ら様ど。手拿まもせさるものゝ段
さしく。かくて今日も知君打って帯の鯛合と

なりゆやせんと。物好み身を吞酒も催理不落て
来しまじ赤らそ帯れとさこく不直目見え
なく好りしとぞ
猿る俳六夜不入りて要人が夜伐吉佗しがわよく
要人も家不めりく茶称。煮へさせて四方八方の咄しま
不俳「トき三四円宝へ要「タア急不姉が病まずと云ッて
咄不来て支なり好ッて来るさいが余ッ紐なるんか支ぶしても
なんとの手留ぐ中よ医しさうなめんざ 俳「ハテ子。ト者がらく

孝ハ実だ。夕紗摩利支天へ参詣仕まする節
ちよつとお民さんのお宅を伺ひまするに何かお客様の話しをきゝ
ござりし門にたち立聞をいたしましたが別に不出不快とい
ふ御様子も見へませんだつたが 此附要人也ひざ救すませ 要「そうして御留ハ居
さ様子ゝ子ト云へども律六親類して去ぬり不孝へ何の云
葉もあらざれバエ。チイト云へども同じく返回す。律「ウン。
おれが好きを要「おれがナト云ハ何が 此附初めて名付言ありひ入るく 律「ホイ
これハさいりこ十二見へアク。二弁。好でござりませう。先刻大徳寺の

門前で見かけた女がどうも見た様だと思つて居りましたが
急にはおもひ出せず。夫を今聞く孝へ話しのでござりました
要「夫をさういふも尤も孫へが律六さん夫ではお前様が親しく
孫へ自己の方ではお前様も恩にかける事ハ孫へがお前様が不
孫ハ出世するにもやしき若の御恩を忘れ孫へ。再生の恩へござ
のトいひますぷヲツウ孫一生残段で参るのも孫へでござりやす
お前がたれいふ。まづ此方ございますで自己もここ夢で突合から
置ござりませ。律「たれもお若お仰せ…先へでも遠へ十分な

ならぬ家の始末も若殿様御不行跡など致しやうが、笑止千万な事。
といふ訳のか。されば孝行も彼も明地に出して笑止千万。
よしやどんなる事があらうとも家の名家の出る世なる我
する気遣ひも経へ行きんじて我が出して孫へも先へも往
来くなりませぬ。我が是は申しますまい。それも性な挽棲なら
新しふ続ざとろ。いふとけるに家の続がよくっても申さん
コへ居ませんが、唯人の噂ぐらゐのものでござる。又如かう
ぐらゐを利きやせん。要「是をさうでも有うが、赤自己の

外の事も家の為に深切があるならば新しく浮もあるまい
言残りたるのも。そのくせ兎の外への言で異なもの。是を自己が
夜あげくまでも手も経くらちに双掛ざんまいの我なる
ものならぬ。是なぞはどちらでも経へつまらず。縁談と云ふと
ものは男と女と互に情合になりた時。初めて縁切に成る
利く奴がもてられて招まれるといふのは役切ござる
お前もそうれの我きけしひろ世我案かて居るので
ろう。是でさ嬉しく思へといふとヨ嘸よくてるまいか

要人
伴六

聞ませぬか。そちもちつと評判でもあるから毎度お前達に聞かれて
かりませうと云つて座敷をとすれば律六為れて
おしやれ律「マア江戸市中在郷まで一月程が済まして中のも
奥様のお為残らずへだてぞ。宜いおぜへせんぞ。夫を奥様が出来
様とうも何も皆出ましたせんぞ。実に池の端の出民さん
の所へ湯の娘が毎日来ませんがどうせう湯の娘と懐合
でもあるやうなもの少々ましてほかに今川本まで湯の娘
と江戸宝と見えて出かけやうするでが見物で人

の評判だから必定当りやせん　要「コウ湯の娘と云ふ
のは尾上湯の娘か　律「ヘイた相サ　要「そうかたらも
志ら色様へ　律「へヱさんぞ江戸見高でも有ますか　要「江戸高りと
いふでもないが不所から湯の娘は夜間へ池の端の稽古
時分だらう。此度芝居へ往つたら呼でも宜からうと
云ふ事もあつたが丈に母お民の宅での稽古時分
だらう　律「丈に宜湯の娘が連て来る天命院の市妙
とかいふ和尚がいつて金銭欲を何らお民さんとでも

根が蔓入れば。浮の海をも月然と大るゝにまかる理屈。彼も
まさ飛優のあらざる切離へ来たりよし。まりあうまでの世
ざがお民さんがこゝ迎のあるに知らし。私らへ顔かも忘れや其
ナゼしやに嫉を呼ぶに来ても往の大病がを弱りけるくと味
あ川く江海の桐ともも有ますまいむ為にするの容人ござりぬ
無理に起きて居るのかも知れませんが主人の留守に呼ぶよし
夜が明ても日が暮ても沙汰なしといふのへ解せぬべきの才一ざ
ねしねずるのも月己の盗定先方がどふいふか留守から

てゝちねうちふうろかゝとやろさまるのも忘れやせん。唯そつ
くりふ五日でも六日でもお指てく亜方が留ろうろと存ます
要「そアあ素より手沈めの先方ゞ沙汰も縁へめの銭此方
から。優銭つくの川て遊ひにまるいれも縁へたれど要縁へか「ア
そんなものでもそのサ全神紛中ちまがいふびどろお富さん又ござア
巳於の江恩だアそれちあう源縁へまけぐが要「十二恩も永く祖も
縁へれども富も月己と同じ中られ病く両親に別れさの銭
不便と思ツて女房にしてあげ立流るゝのも出来ねへが須ぶ身

元来寒ふ多支度も夜て寄川さゞのどりしとされバ暑のことで
矢ッ張町人も町人の方がマの中 善「それ多番頭ハ勤る者でも
探の正しい性もなり淫窓に書れる着でも淫蕩多情ハ生身の
性分ザ 要「ハ何ヨ大判国のせり娘ども多ヶれへが身の内のなさりた
切く捨るが跡の崇せざト當のるすをおもひしせひ許し
とおもふものゝ仕合さりと善六ハ元より十分ぶ恭しとうれへハさ
らねあらしちふぞ。あれのあれのと云皮肉苦労要人ニ喜も残る
させる夜も宿所へすごりけり

作者曰
要人ハ壮年なりといへども流石本家の智者とも人も許せし
者なるが善六ハ元白痴の様く云を誠とし貞烈無双の
お富が其青の仕儀ニ及ぶなるを見をとも誰り智あり
といへん。然様いふ真心ありとも此情合にあらざれバ
が善六ハ遂ニ逢ふ讒言の詮あるべし 余ハ古人も女子ハ賢
人事と同じく不実ニ出来悲べきハ色欲ニなるんありける

毬唄三人娘四編中之巻 了

毬唄三人娘四編下之巻

江戸　松亭金水遺稿
山々亭有人補綴

第五回

茲に流深も幸八が計らひを捨て苦界をも逃れてお絹が許に来り。程なく月満ちて安くも玉のごとくの男子を産みければ其面ざしの亡父追善の為に似てなれば名も亡松と名づけて流深へ来りてお絹と共にせめてもの亡き人の遺身とし

て憂中のおぎさめ菓子とへ咲しにあり 結「小染さん喜和がね
さやうざんす座敷で出会ひましたナ 染「左様でござります升が別に出
座へはましたさト　小染はねさまの情とも知 結「実に其麻縄んぞ
とふくもそもすぐくねにつけてある
も喜右衛門の初魂不生実でヨ拵しても出来ても宿つのを
喜右衛門が達者で いさゝかどんなおかあぶざるり手報の喜
右衛門が存生ごと拵へておぎし中よく坊ぞそもなてる子細も
ゆきまひともの身の不孝ぞおなげれ。あつりト小染お染一卜泣染
も、お結が気持ぞ我身の上を思ふべく同じ泪に呉るゝ 染「僕

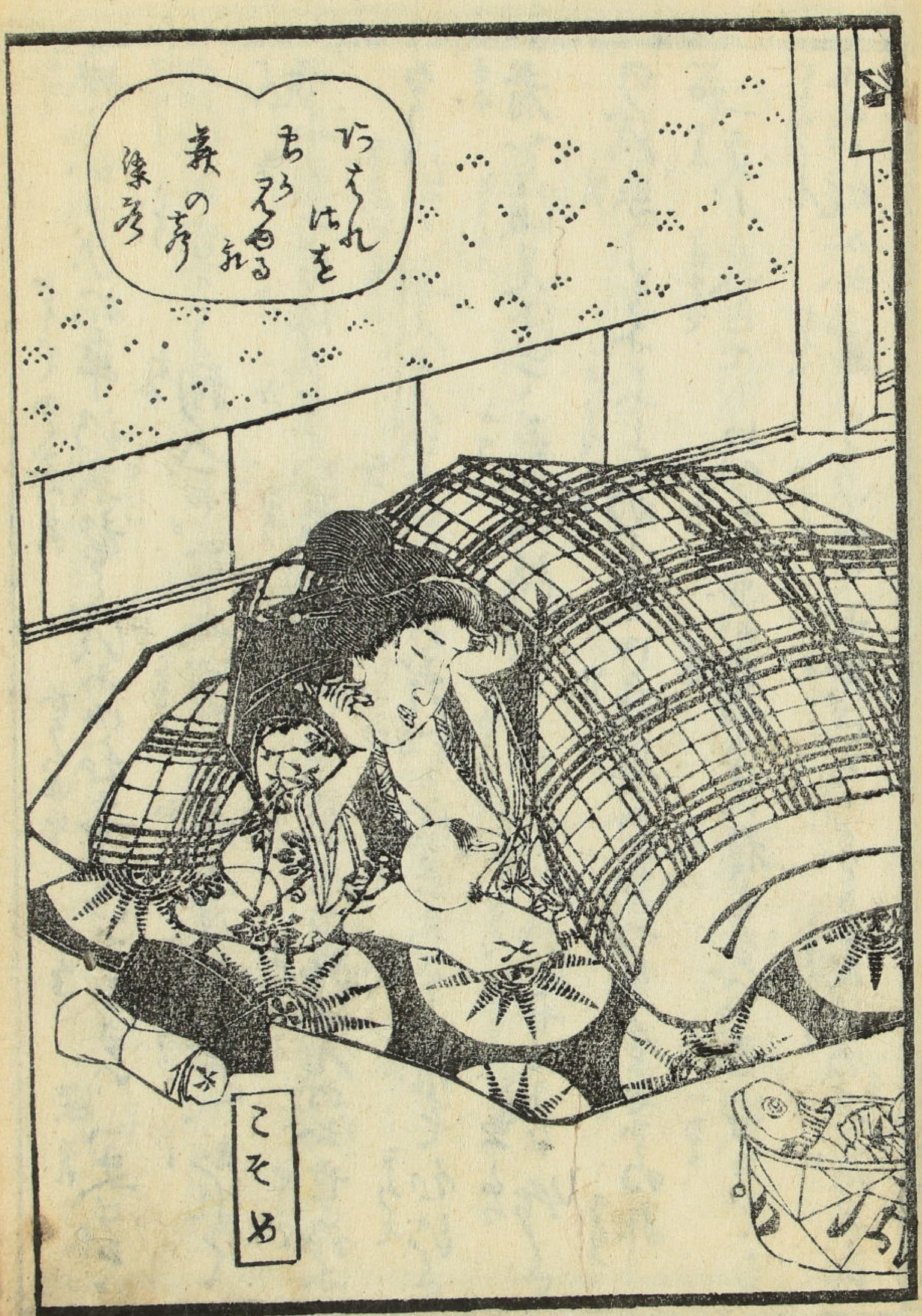
姉さん中も然れでは有本が丁度を之君も昔馴も不義と
に家出をして仕舞ふと云れね憂苦労をでもせ之君は貯
もの幸八さんが随達者で中よく四季をめのが歎きの中
の喜びといふものも有升が宿縁さんぞへお気お若旨を
うけて野辺が良人を非業に世ぞ去たと親子小染
にをたどられく お金を取出し系を上に悪者になど
なられし勤を云ひがしして昔馴縁国果てた者が有う
かと泣てぞかり居ましたが然様さんが気がつく親見身

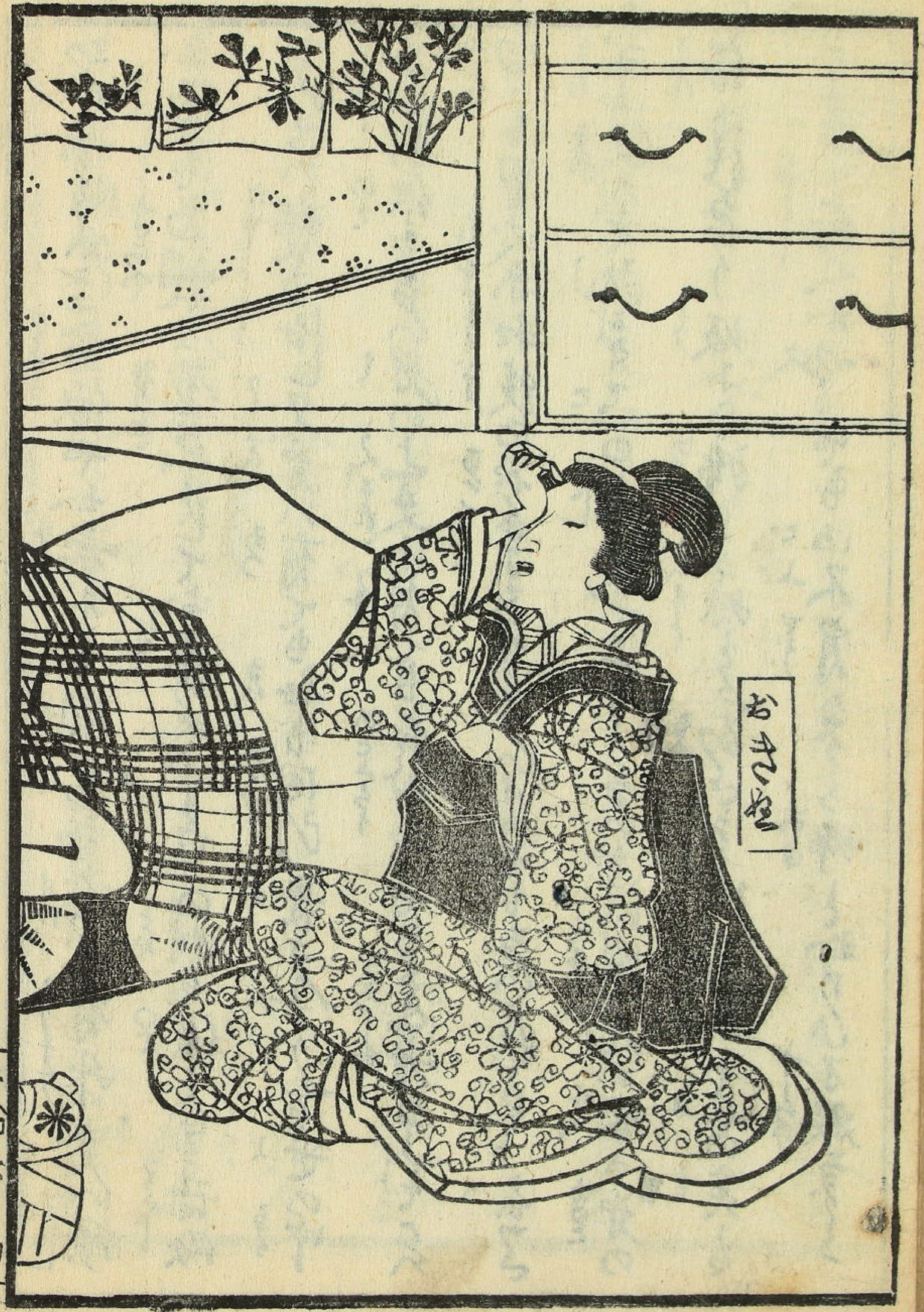
でも及ぬ経伝切込でくだつて要人さんもお月におなり遊して
見ればお寿さんのお娘子の心底を見た時のうれしさ
地獄で仏とはこの事人も云升があんな時でありませう
夫から此方の兄さんのお骨折で吾妻のが此子とお寿
様一所に何もかも御世話しなさつてお前様兄弟
とて寿さんに色々までに何のかのと優しくなさつて
下さればお寿さんの子がひとまんござりませんと
人目も忍び泣ながら乳にとりすがる幼児も母の顔を見ておそ

こがれての恋しさに出が来るせて居るヨキヤくト泣出せば涙
にむせて乳をふくませ間もなく子守唄坊やのおとも
山越て帰るためしも有ながら我が人は死出の山越て遠の
里へ往玉の露の楽しみはなく香敷や筆の爾も不絶何とも
幼児が十万億土の西方へ行側にお絹もかひ泣く眉
尻を濡伴の袖で拭ひ諸へ同じ因果同士が寄合て世話
なりならぬも何の因縁。成ほど吾妹はまさ
んが達者で居るうち宜かりけるのに以前を何の何某と陰

下筋の主で。あつたら先度もお前に此をなりて孝行故に
人を教へし人でいふ。身を麻としも賣られしさせめて、其日から
が一同恩送りが出来ふといふことゾ。夫なりで親に不孝で不更者
といはるゝ孝行をいたすものは丈也。日蔭の身となりて仕
舞ふ所へ入となりきめるのでござんしたもろくは極もまゝ身を
世すごしとなくあわせて女郎という事なりつゝさ孝行に流れて
幸さんもやし幸八ヨ。ソレ幸八と素性も知れぬ人に近付拾ふ
させる孝行のつゝさ死んだが増かすさせるといふ苦労の思案波女上

いひなぐさみに孝行やお前なれど 因果な者を有耳まし優
お前をお親が歴々としてお主の衆。ますゝの時を鏡ふざ孝行
なんぞは親もなし兄弟へ有ても無も同じ事 貴さんよう今世の中
に親の代となるへ身の上変に付ても表立でも達者ならそこへ
男を男丈夫和後の相手もあるまへのそも立へなれども卜云って
取が支こそ死んだ子の年ぞ。是まつらなへが濃深さんお前も身の
縁に深ながり坂にも姉とも妹ともなろうなればこそ来るの実を
りても上方へお帰りでも悟に不肖なぐるぐる姉とおもひ不服なぐる


こそめ



妹とおもひ何卒末永う御心易くして下さい　深「夫こそ
吾妻の方から頼みます。たとへ此方に居る身が田舎へ知れずとも
夜分来ても帰る家は有ませんゆゑ此実家でも姉さんの御世話に
なり此尾張屋要人さんの御作にて彦麿様をも世話いたしまして
者を後見にして再度杵屋の名跡相続させる下心
の私未来までも夫婦と約束して御免界するつもりでござります
若「夫は夫までもいつまでもお出のる人は揃ふへが此田舎でも
御両親がお案じなさつておゐでござりませう実家に帰して居る下さい

一寸参でも知しておかける定と此方門附の上より
「あゝ父母のおもひもよらぬ支の手さへある
探を破りしと庭身を投げて殺く也
憂目残ぬの京都路へ出ゝ身は手
人は東の旅と出立しきた下略
若「門附にしては定めし深「アレヽて洞丁度吾妻も
アノ朝顔の抱ふ田舎へ帰れば是非とも舞取と約束
のをされぬ身アノ朝顔は抱きくらべさぞ男は探を立つは

眠ても泣くらし神もと追まつさしせう竹も君様が気転の
真似でもいるでも有ませんが矢ッ張丈夫田舎へ。ゆくさ取
方が宜しうござりますトいまご云探もよく見をねらむ門の
播多く人がふしぎとして入来る者こく顔合せ流深へピッタリ
深「ヲヤお前は喜さんト云る井の顔なぐの跡も残しごさ
さ見え人でいる男はずつと上り　喜多「イヤ流深さん久しくお目にかゝ
りませねがマアく御無事で目出度ふトひつくお縁をこえ腰
て　喜多「イヤ御同様さん御挨拶も申さず不音年御免くださ

さへまし」三浦屋の二階で一二度お見かけ申しておるも御座ん
ましたが久しく御無沙汰を致しました　孫「左様でござる
ましたか此方はお見それ申ました　喜多「誘ナアとおりまして
肝心の事にまうさぬで私は上州桐生の縮実で喜多八申と
申まして。流深さんの親御に仕われました者。どんな事で
あの太子も世話さ相に成りまして其親の中さらに
ござりませぬ。私が今日出ましたのは此太子が放蕩で
父親は男の事であれば同じ歎きも仕まへ。夫を絶寄なん稼

とも毋にならばこそ泣あかし御の為る間もお気の毒。手
がかりも無き事は諸方へ人を出して探しても。知れねから
理之浦屋の後様さんのお世話して。とうとう此の小僧二朱ご夜
きれる手を上下の者の手に渡り薄情者の勤を
一丈でも一日勤もせぬ寿亭さんの妹蕾さんと云ふ人に
が苦界を振り捨て此方様へ引取てあるとの事。是が縁で
自己も安堵の上。お絹さんが寿さんのお姉さんで有
とおく。おまへさんのけでも非ある親の身も去るゆゑ。〳〵

三人吉下　七

いふる親も人丈夫婦が揃つて嘸喜ぶでありませうトキニ
姉さん給も主人方から御礼に出るでありませうが。是ハホンと
の君様の手前お蔭でございますし存じますが御当地不案内の
自己も手前へかれこれ目録を扇にのせて差出せば結構致して
そんな御心配をなさつちやアいけませんよ今日ハ宿も留守でハあり
波様さんも今御作者さんからお預り申して置いた丈でたくさんとも
済みますがお世話申さう様に。其よりも理屈風変な次第
お喜代様程頂て置ましてお喜代さんも御出なせへ宿でも

小言ばかりいはれる。当時ハ何時も自由にするヨ「ナニ私が其様に仰

見てへハ、此内口でサアモシお絹さん、お前ハ何でもさくいがよい

是を何の深川さんをハお世話らしく為まするねに抱いてことでの為の

三浦屋の二階でも太夫さんけれど、きつい君達お組消に来た下

緒にもをかぞんどするのが一所の縮緬の羽織を一枚仕立

て世帯をもってお縫もせず、又もあり是もあり。ひろふお目伎とハいふ

お絹も今ハんや女郎衆とやつれ客の恵みに、お約がある

事とも出来ぬの業にされるものから、抱主が太鼓持もいふ事あるまいし

なくて一生ドウも縁に安楽の毒ではなければ誰の品が取裁いた

外に「其で自己も難有い」深「サア其おさん、お茶をおあがり。あんまり

姉さんと他人に実々に全くあいさつ。お湯を冷さして太きにお

茶を延びました。孫「どうしてくそんなに他人行儀をおつしやりますか

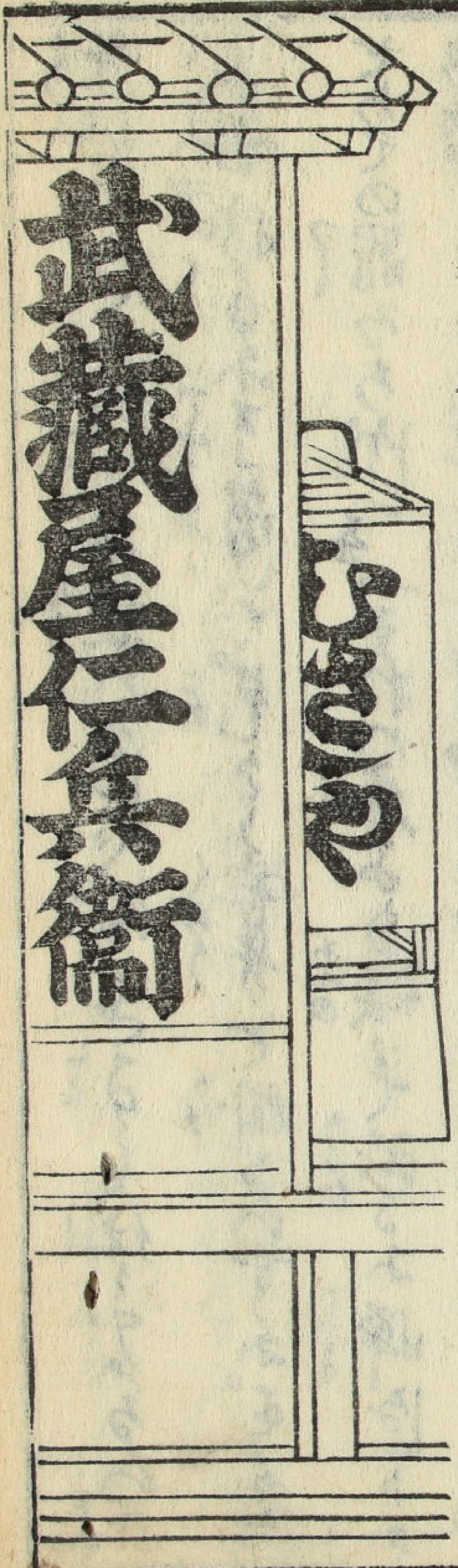
いけないよと深川の新造ともっと手を打てそうか、ひどく又になった。アノこれが

婦さん、はんの縁に嫁ンで居てハテあっちそれならおものアノ昭つれなら

にりくが花さんに生写しだ。ドキ三深川さん。今其方る門口で

アノ門附のよアりが見面白く立どまつて其方ハ宅での出し

親父がどうか世の中店の奴の世がぞし寵みるのが立哭きましさ
家も田舎へやらねのが互によい心もち吾が婿さんがでむかして縁
屋の家名を継ぐるにも本店が深浅が毛とふ浅草しられば承知
まるるも済むといふのも喜ぶ嫁ごといふもの或無理に婿
とべ夜せ中々く支払歌舞も御仰まへ月も朔日を仕
舞まふけるつもりは西郷へ参り組わ朔日の夕と下る黒町二丁
目の武蔵屋と届く致深「ある程お茶のいふ参り海より
深く山よりも高い御恩を少しも送りもせぬ御苦労かけて其



上に居る下さもおまへもせわさまのをいつでも吾徹がよろう
ござんはしてをるへ姉さんも委しく御進めならさん一寸
お婿を取のが嫌さに是く御進めすれ程へ御が最の
実現で護御ましくぞんまる甲月の夕方までむさしや
さんと届けませう「実に母丈が互に吾傲ちんそも

巻紙のあらい時ハ丁寧に御ハなしで済ませるものを仕方なくカタ
手前勝手な手習して。蛇ハ苦労を掛るハ知らず。あるが
せめての罪ほろぼし 長「されバ君子も偶ッて漏るに憚ハ遠しトか
お郷も候しんぞも座敷しましょくドレく 岩帳
いとしませう 絹「マア喜三さん何るの此義ぢやアおなじぜ
でも有ませうが敵の宅へ来ても此様に構ハるゝ
ひいきらう 喜「十二支又。出府いさし弁 深「マア喜三さん
久しぶりでゆるりとして。お出ト法深がさてゆるとそうち

に。お絹を酒の洞庭を擂へ洗髪となかさせる細根
大根に守口の香の物浅草海苔と。この品を銭に換へて
法深に出させ。宝物を嚢から二ッ物を跳へに後より嫗が
も知らせん跳へ一着も知れバ喜三郎も事より香るにおれバ
何故かふ絹ひッてあそんじハ憂鬱すべきなり

第六回

人仏にふえへどもいとど法を奪るおれを我おのの嫗や悦ざるハん下御
製も今ハ己が身となりし要人ハ伴六が。工そるをりわがおもへバ

お留が不実を旦暮恨みつゝ。八裂にしてもあきたらずといへども
たらんとおもひしかど。先だつ浮世の有さまと六日七日へ其まゝ縁に
打捨置しが。其後も後をきらしも孫もわすれざれば世忌の手前上
への哭へ。是外聞を憚れば。或日池の端なる本屋が伴へ
後追まわりに様々と包みもありて。ことまで猿書を名留
を塚へしぼれば。お民を聞くるさまそしとて。須下をも
することを文不

まさくありし先だつまへ人の為に急病

よしや夫拙者留守へ御便ぞお留が伴に
清く五つに成りし。たとへ姉の急病なりとも
主人の留守に女房の一下歩てすむべき
事かと問も無く孫太郎が来るなるを
諸とお留が新宅を後でも訪ふとありしかば
いかに当人お藤の人志し親身の姉妹
が大病とある。かつハいりとも直に帰るが法
酒の相手まで出来る病人ふあらば六日七
胃病を今まじきるにしと尋りし
帰る処のうたん人ともいふ帰れといふども
ほしともとあるまいとて不承〳〵

おはなしを催促(さいそく)なさんすとひまが有(ある)だらう

民「ヲヤマア留(とめ)さん御伝言(ごでんごん)よ。お死去(しにさつ)なるじやアないか。お気(き)の毒(どく)に
御後(きうじん)づくも能(よく)出来(でき)ました。夫(それ)に女(をんな)どもと酒の相手(あひて)の出来(でき)る
病人(びやうにん)に看病(かんびやう)へ入(いつ)てはえんと大きにお世話(せわ)で留「ばゞ婦(ふ)さん前(まへ)へ
さんをどう見(み)て居(ゐ)るの近所(きんじよ)のあるきが申(まう)しますなる位(い)ぞ
よまいそ申(まう)す人(ひと)ハ有(あり)ませんが是(これ)に民「此(この)子(こ)もいく
か賊(うぞく)なる屋(や)ども有(ある)ハ五(ご)ふう年(さ)の女房(によぼう)を盗(ぬす)み出(だ)した
一度(いちどん)でおわかし居(ゐ)る留「なんして其(その)あと跡(ごさい)ながらよ

世界仏(きき)「もおしくのねバ久庵(あん)音頭(おんどのどうく)同行て
今のまも御のかもあるんも念仏(さうくわんぜまた)の下(した)から
あとは山(まいくまうてらんかう)乱行(らんかう)までありやし

民「久庵(あん)さんハホンニ孝行(かうかう)親(おや)を前(まへ)がお待ちれ居(い)る日ハ一寸(ちよつと)祇園(おまさと)に
遠(ちが)ひもないが都(みやこ)の暁(おやき)にハ久庵(あん)さんが居(い)るのが見(み)へる
琵琶(びわ)法師(ぼうし)「然(ぞ)く来(と)ましたハ留「夫(それ)じやアちよいと(さう)座(ざ)ッて居(い)らっしやいまし
先(まづ)に吾(ご)(こうし)嬢(じやう)の年(き)にあるのハ此(こ)の芸(げい)ハ来(まい)りて時市(えいちゆう)妙(め)さんが
ひどく辞(じ)て鬼(おに)あつこの段(だん)まくしと吾嬢(こうし)お話(お)の付(あひ)け

支度をして琵琶姫なる笹田が許へおもむきて陸と
薬園殿に乞はれば此方も待請し居られば客間へ招ドて
茶煙草盆運などせるが主人の要人殿もやがて出来り
一別以来の挨拶終りて民「先程もお頼みで参りました久
庵さんも此間は致さぬをもうふとのるで足さらずおひかく
下女も居ませんば他の者もありませんば。諸不久庵さんは去坂
親達不惜生中おなさきが上御まへ久庵へ不んの衣為出来れ
の所以以後へ里さと不波よりかへ秋る久攸婦の彼

出して。手ずからに桜の木へ引かけて首縊て仕舞しく
のが。宿ナ辻占ごと文が気になるらしく仕ろうなへのですョ
どうぞお前さんが琵琶姫へお出なさるまでも段々まぎれ
あんまり何も御郷なんて方が宜ござん升。民「お前も余り経
来漣ござんす。音曲師がモウあんまり仕くさくあわひへ会て
気おもしろうされども竹丈去なんでもう不致ませうヨ。係
あんまり何かを気にあてでない節ごつて素敵ござら
本へ引かけて切ることあるまへドレ往く来ませう ト

お袋さの代よりや江戸表へ上りまはしまれついて久庵
さんを御同居にも及ぶまいとぞんじて今は吾微一人で身上
ましさ 要「十二より久庵が存じてもいが役にお暮が不痛
きのよしで迎ひにきかれさへ世話へさが今月とも此沙汰が
なく。表兵衛殿でも達者で居るべ思案致るがよし者
うが御成のうちも女がおちる。言ふ所がなじますまへ。定めし
お富も身どもの方へ上りして奥のが増でもよかろうこのごろう
身どもも連添女房のよう身分お寂不気に謝るつもりざが

お富も何ぞ不足なのでござろう 民「どうせお相手不足でござんす女
斗りは他の男衆の言いなりの渡世で女房に子どもさのわけ有
ません。お富も何も不足にござりますとへお覚えお云ちへおちやる
ござりませんが縁あればこそ不縁の基とたとへにもいふ通り親も
なへ宿なし同様な者とお腹立ちへ挑灯に鐘釣合ぬ縁より
御世話ちがひありませんか 要「何も縁が不似合ざとて言ふ者へ
面白くも無し 民「ヘンどうせ面白くもございませんのさそれへ顔を
往の母が辛いと申す足を申すからの身に女房[illegible]

多人

お民

引きませんやな十月も十月も後生大事にお腹に養生して居る
女ゆゑ。相談の多い女ですからまづ此時要人は笑ひ　要「女房の甘さはまづ
お前に乳母を志様へ。たとへ女房は罪が因者無致なくらば
男の独りで。女房の方から仕送りをして世間の手前でも立ち女を志せし
民「仕送る工面が出来ますならば肝要をせまし（い）たして居ま
せんもう仕送らない時はお暇をいたゞきませうから仕送りの出来ぬる
女なら二人でも百や五十はしナ　要「ナニどうしても不足ならばお暇
を世間へ　民「夫なるならば申しませんが今に及ばばお暇を

いたゞきませう　要「了簡のよい女と存じて縁辺すりや不法
なるのぢやナス奴だ　民「ナニも不法ではありませんお前さんの女房なら
お暇をいたゞかうとやしたのでござりやす　要「いやいや暇をやれといふのか　民「お暇
が出ましたら離縁状をいたゞき度ござんすネ　要「夫やさうだけれども其
れじやあ是まで家の為に具足武士をつくしたとへ
内證も毛も角も久庵が里親のゆづりの望月までも久庵を
立合して伝兵衛引取らせてよいと時離縁状とて
としたが　民「それはもう久庵さんに相談

いさしていさぎよく参上ませう。久しく不調法な姉と此間
うけられし疑有ければじましくて下根気さへそうし不思議縁
りもなくと不思さ足していさぎよくなり
是より弟が身の成行お民お絹の再会より
幼稚に二の赤心線あるべし浪深が丈の仇付と
めへんを大尾としる通月発兌なる不お鉛限る
読伏て幸希い

毬唄三人娘四編下之巻了